

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学研究科	社会学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科・社会学専攻・博士課程後期課程2年	片桐 正善	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	社会学部・教授	奥村 隆	印
自然・人文・社会の別	社会	個人・共同の別	個人
研究課題名	自閉症と知的障害の区別に関する社会学的考察——用語変更から考える		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2011	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

自閉症は精神障害の中でも時代の影響を強く受けてきた歴史を持つ。当初は心因論として提起され、統合失調症を解明する可能性として理解され、1970年代ごろからは脳器質障害説を経て、特異な行動をする先天性の障害児として理解され、今日は特別なニーズを持つ支援対象者として理解されようとしている。これらの変遷を、知的障害という類似の精神障害との区別と、名称変更という表象の変遷からみていくことがこの研究である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[自閉症] [知的障害] [用語変更]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

自閉症は 1940 年代に、アメリカのカナーとドイツのアスペルガーによって同時期に提唱されたものとされている。当時の射程でいえば、カナーにとって早期幼児自閉症は、当時の精神医学の謎であり人間の心をつかおうあらゆる科学にとっての謎であった精神分裂病を説くための可能性を示す概念であり、児童精神医学という科学を独立したものととして成立させるための可能性でもあった。一方、アスペルガーにとって自閉的精神病質は戦時下のドイツにあって劣悪な差別を受けた障害児を救うという目的の中で特異な行動をする児童の教育可能性を示す概念であった。どちらも今日でいう知的障害とは全く違う射程の中で生じたものであり、当時の時代の影響を強く受けた概念と言える。

そのような概念が、日本にも 1950 年代後半ごろに紹介された。当初は児童分裂病、小児分裂病などともいわれ、まだ概念としての混乱が見られていたため名称も自閉症で統一されてはいなかった。しかし、1950 年代後半頃から、児童の精神医療に関心のある医学者が集まる機会が増え、その象徴として自閉症がトピックとして扱われだし、そこにカナーの下に留学して帰国した牧野が自閉症児と認定したことから「自閉症」というワードは児童精神医学研究者内にエビデンスのあるカテゴリーとして広がっていく。結果、1960 年にはカナーの射程通りに日本でも自閉症研究を主たる柱として児童精神医学会が設立され、その後、自閉症の原因に関するさまざまな論争が医学レベルで生じることになる。ただし、児童精神医学会の機関誌である「児童精神医学とその近接領域」には創刊号より当時でいうところの精神薄弱に関する論文も少なくなかった。つまり、少なくとも当初は精神薄弱も児童精神医学の射程されていたことを示している。また、当時の機関誌の作成に関わっていた高木隆郎は、当時は精神薄弱を扱わないと売れなかったとも語っている。ただし、当時の論文では、自閉症と精神薄弱の関係性を問うものではなく、精神薄弱児にも自閉「的」な児童は多いという指摘にとどまっている。

それが 1960 年代中ごろになると、前述の精神科医・牧田によるカナーをベースとした早期幼児自閉症論と、小児科医・平井信義によるアスペルガーをベースとした小児自閉症論が対立、どちらが真の自閉症かをめぐって学会を巻き込んで様々な論争が巻き起こる。ここでは、牧田が自閉症に似たものとして平井の症に自閉症を揶揄して「仮性自閉症」なる言葉も使いだし、自閉症周辺の議論は混乱をきたすが、その結果として、自閉症は単に児童精神医学という医学におけるニッチな部門のワードではなく、精神医学全体で共有される概念として認識されるに至った。このころはおいては、いかに自閉症児をみつけその特異性を報告するかということにやっきになっていた時代であり、精神薄弱との関連性が問われることはほとんどなくなっていた。

しかし、1970 年前後に大きな転換が生じる。イギリスのロンドン学派と称されたラターやウィング、そしてアメリカのショプラーらによって提唱される脳障害説が、特異な行動をクリアカットに説明するにたる論拠を提示しえたゆえに、自閉症児は先天的に脳器質障害をもつが故の障害児であるという定説が一気に広がった。その影響は日本に及び、牧田－平井論争は終結、ほとんどの医者がその説を受け入れて自閉症の本質を問うなどということはなくなり、自閉症の議論は「障害児としてどのように処遇するのがよいか」という議論へとシフトしていくことになる。この結果、自閉症児の支援は、それまでの医者による遊戯療法メインの支援ともいえないようなあつかいから、制度的に整っている精神薄弱児者支援の場へと引き継がれることになる。ここにおいて自閉症児＝精神薄弱児という図式が脳障害説を介して行政的にも正当化されることになる。つまり、自閉症と精神薄弱は全く違うカテゴリーであるどころか、そもそも交わることのないもの、自閉症とは心因的に自分から語りできない障害であり、精神が遅れている障害とは違ふとされた以前の議論は全く覆され、自閉症児のほとんどは脳器質障害によって精神薄弱を伴うとされてしまったのである。心因論から脳器質障害説への転換を、自閉症のコペルニクスの転回と呼んだのは中根晃であるが、このような転回は医学における自閉症の原因にとどまらず、当時でいう精神薄弱との関係においてもきわめて大きな転回が生じていたのである。

したがって、1970 年代以降は自閉症児者の支援の場が大学や病院の遊戯療法室から福祉的支援の場に移ったことによって、当然ながら「自閉症」という概念も児童精神医学者の独占物ではなくなり、知的障害児者の支援者・教員らによっても共有されることになった。では、知的障害児者の支援員や教員は、自閉症というカテゴリーをどのように受けとめ、どのように知的障害というカテゴリーと関係させて理解していたのだろうか。

本研究では知的障害者の親の会である育成会の機関誌や特殊教育の機関誌などを使って当時の「自閉症」という言葉の使われ方などを分析しているが、自閉症という言葉が研鑽されるのは 80 年代以降であり、それも自閉症特集のような企画がたてられた場合が主であった。障害児周辺の制度において 1980 年前後に起こった大きな話題としては、1979 年の養護学校義務化、つまりはそれまで就学猶予や就学免除として義務教育すら満足に受けることができなかった重度障害児の義務教育を制度として受け入れたというこの象徴的な出来事がクローズアップされることはあったが、これは自閉症に特化したものではない。身体知的の区別なくあらゆる障害児を射程とした議論である。そして、そのような議題の中で特別自閉症がトピックとなることもなかった。つまり、自閉症というカテゴリーは知的障害の業界の中で大きな議論になるほど受け入れがたいものではなかったと言える。

研究成果の概要 つづき

もちろん、まったく議論がなかったわけではない。1970年代には前述の平井が特殊教育の教員たちに「自閉症児は他者と交わることで成長する児童たちである」と訴えて、自閉症児を学級として受け入れることを教員に要望するエッセイを書いたところ、「特殊教育は単純精神薄弱児のための学級であり、自閉症児をのぼすためにある学級ではない、本末転倒だ」と批判されたりもしている。もちろんこの背景には自閉症≠精神薄弱という見方をまだ引きずっていたところがあり、このような水準の自閉症教育への批判は1980年代にはほとんどなされていない。ただし、1970年代後半から1980年代の特殊教育関係雑誌には「自閉的精神薄弱」という言葉や「自閉的」という言葉はよく見られる。これは1960年の児童精神医学会の設立のころに精神薄弱研究プロパーが自閉症ではないかもしれないが自閉的な精神薄弱児が多いという議論を行っていたものと重なってくる。ただ、一方で自閉症という言葉を使わずに「情緒障害児」なるカテゴリーを使って、差異化を図り、自閉症児の学級を作ろうとした試みもみられる。少なくともここで言えることは、現場の支援の立ち位置によって自閉症という言葉を使ったり使わなかったりうまく回避したりといったことが見受けられるということである。

1990年代に入ると、知的障害の分野で大きな転換が生じる。それが精神薄弱から知的障害への用語変更の議論である。精神薄弱という行政用語が差別的であることは1970年代より語られてはいた。したがって、現場においては精神薄弱という用語は行政関係以外ではあまり積極的には使われず、「知恵おくれ」や「精神遅滞」そして「知的障害」といった言葉が使われていた。この二重用語の状態に終止符を打つことになった背景はポリティカルコレクトネスといった議論が欧米から入りだしたことなどがあげられる。ただ自閉症との関連でいうならば、1980年代ごろから精神障害分類の世界的基準であるICDやDSMが操作的基準、つまりそれぞれの障害に明確な境界を設けるような基準が広く使われだしたことが大きいだろう。それによって「精神薄弱」というあいまいなアイデンティティではなく、「知的障害」という障害であることを明確にした概念に統一する機運が高まった。ただし、知的障害とはIQ70～75以下をメルクマールとしたカテゴリーであり、明確に協会があるわけではなく、知的障害者／非知的障害者の間に連続性のあるものであることは明らかであり、「障害」と明示することには学者などからも反発があったのだが、知的障害者の親の会である育成会が「知的障害」という用語を強く後押しして押し切ったということが当時の言説からはうかがえる。つまり知的障害という概念は科学的なカテゴリーではなく事態の産物といえる。

では自閉症はどうか。自閉症は知的障害以上に自閉症者／非自閉症者の間にはっきりしたメルクマールはない。ないにもかかわらず、知的障害以前に脳器質障害説を前提とした脳障害として定義されてきた。したがって、1990年代後半以後、特に知的障害の用語変更を受けて、自閉症協会機関誌などでは自閉症という名称を廃止して、はっきりと脳障害だとわかるような誤解を生まない用語に変えてほしいといった発言が自閉症児者の保護者・家族などから頻繁に出されるようになった。2000年代に入り、日本自閉症協会の情報誌『心を開く』が『かがやき』というタイトルに変わったことは象徴的である。

そして、2000年代に入り、知的障害の分野では1970年代よりあらゆる精神障害を広くカバーする概念として、ケネディ政権下のアメリカで提起された「発達障害」という概念が、日本において自閉症とその周辺の障害を知的障害と区別する用語として使われるようになったことは広く知られている。この背景にある「発達障害者支援法」を成立させることに尽力した超党派の議員の中でも、医師でもある阿部知子は発達障害という用語については最後まで疑義を呈していた。

そして、2010年代を迎え、2013年にはDSMが改定されて、自閉症のDSM内での用語である「広汎性発達障害」は「自閉症スペクトラム障害」へと変更されようとしている。支援者や関係者、自閉症協会はこの新たな用語をどのように受けとるのだろうか。「自閉症」という名称が正式なカテゴリー名として復活することに対してどう評価するのだろうか。当然ながら他の時代同様、近隣する精神障害との関係や時代精神によって受け止め方は異なってくるだろう。

ただ、ここでいえることは正式な用語の名称は極めて時代的・政治的な産物であること、一方で「自閉症」「自閉的」といった用語は現場でいまだに使われつづけていること、つまり用語の背後にある支援者の人びとの一貫した何らかの態度を見つつ、その背後にあるものと正式な用語名称とのつながりをも射程に入れる議論をする必要があること、であろう。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

今年度の学会や学会誌で発表・投稿する予定。

以下、予定

- ① 障害学会のジャーナル『障害学研究』への投稿
- ② なし
- ③ 東京大学共生のための国際哲学研究センター (UTCP) での報告
- ④ 福祉社会学会、障害学会大会での報告